

横山ゆずり作 受験 パート 2

< 前編 > 「帰宅部長の悩み」

- 教師 (女) そうしますと、この間の面談での本人の希望どおり、ということですね。第 1 志望が国立西大付属、それから 18 日が東京中央女子、19 日が練馬台、で、滑り止めが都立と。
- 久保恭子の母 はい、その線でもよろしくお願い致します。
- 教師 まあ国立西大付属は、挑戦のつもりで気楽に受けてくればいいでしょうね。この内申なら、どう転んでも都立の高嶺は安全圏ですからね。
- 母 まあ、おほほ、あの、うちでも初めのうちはダメで元々なんて思っていたんですけどもね、何ですか本人がかなり本気になりまして、絶対に入りたいだなんて申しましてね。お陰様で、いい塾と家庭教師にも恵まれましたもので、ここ 2、3か月の模試の結果ですと、合格率 70 パーセントまでには入ってますんで、何とか...と思ってるんですの。
- 教師 まあ、家庭教師もつけていらっしゃるわけですか。
- 母 ええ、主人もあたくしも、できるだけことはしてやりたいと思ってますんで。まあ、ここまで親が尽くしてることは、この子も十分分かってるはずですから、それでダメだったら、あなた責任とる覚悟はできてるんでしょうねなんて申してるんですの。おほほ。
- 教師 責任、ですか。
- 母 まあ、それは半分冗談としましてもね、それくらいの気持ちで臨まないと、西大付属は厳しいと聞いておりますしねえ。幸い、今のところこの子も期待にこたえてくれてましてね。もう塾と心中でもするんじゃないかってほど、やってますので。
- 教師 (さえぎるように)久保さん、あなた自身はどうなの？ 今お母様がおっしゃったとおりでいいのね？
- 久保恭子 はい。
- 教師 最近特に頑張ってるのは結構だけど、あまり顔色がよくないようですね。たまには休み時間にみんなとバレーボールでもするとか...
- 母 (さえぎるように)いいえ、先生。今はもう試験まで秒読み段階ですし、ましてやこの子は国立ですから。ほかの普通の生徒さんよりも試験日が早いですし。もう 1 分でも 1 秒でも惜しい時ですの。健康管理は、母親であるあたくしが、十二分に気を配っておりますので。
- 教師 それでしたら、学校としても、これ以上申し上げることもありませんが。久保さん、あと、あなたから何か言っときたいことは？
- 恭子 いいえ、別にありません。

母 それでは先生、ありがとうございました。どうぞよろしくお願い致します。ごめんくださいませ。

(効果音) (ガラガラ戸の開閉の音)

教師 (フーっとため息)
(恭子と母、歩きながら)

母 何だか、あの先生、頼りないわねえ。調査書のほう、ちゃんと書いてくれるのかしら。

恭子 学校の先生は、みんなあんなもんでしょ。しょうがないわよ。

恭子ナレーション わたし、久保恭子。青春中学の3年生。受験を控えて、今は勉強一色の毎日。それは、ひとえに国立西大付属に入るため。「あそこに入りさえすれば、一流大学合格は約束されたも同然なんだから。」とお母さんは言う。そう、西大付属を第1志望にしてから、すっかりお母さんのペースで事が運ばれてる。今日も「三者面談」だったけど、結局、うちのお母さんが一人でしゃべってたから、先生もわたしもほとんど口挟めなかったし。でも、これももうあとひと月の我慢だわ。晴れて西高生になれば、何でもできるんだから。

(効果音) (教室のガヤ)

生徒 (口々に)「じゃね。」「バイバイ。」「寒～い！ 雪でも降るんじゃないの？」etc.

恭子 (問題集を見ながら、ブツブツ英単語を暗記している。)

2年女子A あの、すみません。

恭子 なあに？

女子A あの、松林先輩、呼んでいただけますか？

恭子 松林さん？ あ、いるわよ。待ってて。

女子数人 (口々に)「ゆうべの「夜ヒット」見たらさ...」「...そうなの。すっごくかわいいよねー」

恭子 あの、松林さん。

松林恵 何？

恭子 2年生の子が来てるわよ。

恵 あ、ありがと。

女子A 先ばーい！ お元気ですかぁ？ この間の追いコンの時に、記念品渡せなかったから。

恵 ありがとう。みんな、ちゃんと練習してる？

女子A してますよ。バッチリですよ。先輩、勉強大変ですかぁ？

恵 まあね。でも、わたしそんなに高望みしてないから。どっか一つ受かればいいと思ってるんだ。

女子A また、謙そんしてえ。でも風邪引かないように気をつけてくださいね。わたしたちも陰ながら応援してますから。

女子 A 決まったら、また教室に顔出してくださいねえ。

恵 うん、ありがと。じゃ、みんなにもよろしく言っといてね。

女子 A はい。じゃ失礼します。

恵 あー、にぎやかな子。あ、久保さん。どうもありがとね。

恭子 ううん。後輩？

恵 そうなの。英語部の。

恭子 松林さんて、英語部だったんだ。

恵 うん。文化祭を最後に引退したんだけど、その後も何かと来るのよね、あの子。

恭子 へえー。後輩か。

恵 久保さんは？ 何部だっけ？

恭子 あたしは入ってなかったんだ。1 年の最初のころ、ちょこっとバドミントン部にいたけど、すぐやめちゃったから。

恵 あ、そう言えば、久保さんて、帰りの学活終わると、いつも急いで帰ってるもんね。みんなで言ってたんだよ、「帰宅部」の部長だね」って。

女子 (オフで) 恵ー、早くー！ 土曜日の待ち合わせの時間、決めてんだから。

恵 あ、ごめん。今行く！ (オフに)

恭子 (モノローグ) 帰宅部の部長か…。

ナレーション 正直言って、後輩たちに囲まれた友達を見た時、うらやましかった。彼女は、部活という自分の居場所がちゃんとあったんだな、と思った。あたしは？ あたしの場所は、この学校では、教室この席だけ。それも授業中のだから、授業が終わると自然に“帰宅部”になってしまう。考えてみれば、クラスの友達と、放課後いつまでも残っておしゃべりしたこともなかったな。そんな時間はもったいないと思ってた。でも、このまま卒業していくのかなあ、と思うと…。いけない、いけない、今はそんなこと考えるよりも、ひとつでもたくさん単語を覚えなくちゃ。(英単語の暗記を再開)

ナレーション そんなある日、塾から家に帰ると、お父さんとお母さんが何か言い争いをしていた。

父 何を言ってるんだ。恭子はおふくろにとってはたった一人の孫だったんだぞ。行くのが当然じゃないか。

母 そんなこと言ったって、この時期ですよ。もう国立の入試までひと月ないんですよ。今は 1 秒でも時間がもったいない時なのに。

父 試験と人の生き死にとどっちが大事なんだ！

母 それじゃ、はっきり言わせてもらいますけどね、今は恭子の試験のほうが大事です。なくなったお義母様^{かあ}だって、きっとそのほうが…。

恭子 ただいま。どうかしたの？ 何があったの？

母 あ、恭子。こうちのおばあちゃんがね、長いこと入院してらしたのは知ってたでし

よう？ 今朝、おじさんから電話があって、とうとう…。

恭子 おばあちゃん、死んじゃったの？

父 ああ。お前も、最近忙しくて会ってなかったが、小さいころはずいぶんかわいがってもらったんだ。父さんは今夜飛行機でたつが、お前どうする？ おばあちゃんに、最後のお別れをしに行かないか？

母 あなた。

父 いいから、母さんは黙っていなさい。

恭子 あたし…行く。おばあちゃんにお別れしてくる。

ナレーション わたしはなぜか、どうしても行かなくちゃいけないような気がした。受験前の、この大切な時期だからこそ、行かなくちゃならないような、そんな気がした。

(効果音) (空港の発着便のアナウンス)

母 単語カードはちゃんと持ったの？ 飛行機の中の時間だって、有効に使わないと…。(FO)

(効果音) (飛行機の離陸音)

ナレーション こうしてわたしは、その夜の飛行機で、父とともに高知に着いた。

(効果音) (教会内。賛美歌)

ナレーション おばあちゃんの告別式は、教会で行われた。ひっそりと棺に納められたおばあちゃんは、何年か見ないうちにずいぶん小さくなってしまったような気がした。教会堂に飾られた、穏やかな表情をたたえるおばあちゃんの写真を見ていると、懐かしい気持ちが込み上げてきた。けれども、不思議と涙は出なかった。長いこと入院していたおばあちゃんの死が、突然ではなく少しずつ心の準備ができていたせいかもしれない。それに、久しく会っていなかったこともあるかもしれない。でもそれ以上に、この教会での告別式の雰囲気のせいじゃないかな、という気がした。たくさんの人たちが、おばあちゃんのために泣いてくれている。でも驚いたことに、わたしはそこに、何と云うか、ある種のすがすがしさ、明るささえ感じた。そこには、人の死には付き物の、絶望的な暗さ、取り返しのつかない重苦しい悲しみといったようなものは感じられなかった。それどころか、一人の人間が永遠にこの世から去ったというのに、みんなして歌まで歌っている。やがて牧師さんのお説教が始まった。

牧師 今、私たちは、一人の敬愛する姉妹、久保ときさんを天に送りました…。聖書では、人が一度死ぬことと、死んだのち…。けれども、主イエス・キリストを信じる者には、永遠の命が…。

(音楽) (賛美歌「神共にいまして」)

ナレーション 永遠の命。永遠…。何か気が遠くなるほど長い時間。今わたしが、それこそ1分1秒を惜しんで、あくせと勉強している時間も、それに比べたら、ほんの一瞬のことかもしれない。そう考えると、わたしの今やってることって、なんなんだろう

って気がする。中学 3 年間、友達と遊ぶのも、部活も我慢して、必死に勉強して、高校に入っても、またすぐに大学受験。そのあとは？ また就職試験。そして結婚？ そして、いつかは...死。だとしたら、わたし、何のためにこんなにガリガリ勉強してるんだろう。どうせいつかは死ぬのに。

そんなことをボンヤリ考えていたわたしの頭に、教会の人たちの歌う賛美歌が静かに染み込んできた。

(音楽) (また会う日まで。また会う日まで...。)

恭子モノローグ また会う日まで...。おばあちゃん。

ナレーション その時初めて、なぜか涙があふれ出て、止まらなかった。

<後編> 見えない世界へ」

ナレーション おばあちゃんの告別式の夜、いつまでも、あの賛美歌の響きと、そして“人はいつかは死ぬんだ”という重いが頭から離れなかった。わたしが、この3年間、自分の楽しみを全部我慢して頑張ってきた受験。でも、どんなに頑張っても、結局は、みんないつか死んでいく。東京へ帰ってからも、そんなことを考えているうちに、時間はビュンビュン過ぎていった。そんなわたしを見て、わたし以上にいらだち焦っているのは母だった。

母 あーあ、やっぱり高知に行かせたのは間違いだったわ。それでなくても神経質になっている時に、あんなところに行って、動揺するのは目に見えていたのに。いい、恭子。今は、ほかのことは何も考えないのよ。ただ試験だけに集中するの！試験が終わってからも、いくらだって時間はあるんだから。

ナレーション 違うの、お母さん。あたしが考えてるのは、そんなことじゃない。」そう心の中で言ってみても、母には何も通じないことは分かっていた。でも...

そんなある日、朝の学活でのこと。

クラス委員 静かにしてござーい。ええと、今から白い紙を配ります。それに、クラスの人全員への卒業のメッセージを書いてください。ええと、みんな、それぞれ仲のいい友達と、サインの交換などをしていると思いますが、やっぱり、暮らすとしてのまとまったものが記念に残ったほうがいいと思いますので。

生徒 (口々に) えー、全員？」知らねえやつもいるじゃん。」男子になんて書けないわよねー。」

クラス委員 ちょっと聞いてくださーい！ 全員の分は大変だと思いますけど、1年間クラスメートだったわけだから、何か書くことあるでしょ？ 帰りの学活で集めて、一応本人に見せてから、まとめて印刷しますから。

(効果音) (反応のガヤ)

ナレーション そして次の日。

クラス委員 昨日の、クラス全員へ一人一言の卒業メッセージを、いったん配ります。自分当

てのメッセージを見たら、必ずアルバム委員に返してください。

(効果音)

(反応のギャ)

クラス委員

「中島くん」「はい、辻さん」「梶原さん」「久保さん」

恭子モノローグ

「久保さん、いつまでも元気でね。」久保さん、高校へ行っても勉強頑張ってください。」秀才久保、西大ストレートを目指して頑張れ。」輪が青春中始まって以来の、国立西大付属合格。久保さんなら大丈夫。高校へ入っても、たまにはわたした地凡人のことを思い出してね。」...勉強のことばかり。あたしって、やっぱりこういうふうに見られてたんだ。仕方ないか。でもあたしが西大付属に入ると、みんなが思ってる。確かに、そのために今まで頑張ってはきたけど、でももしダメだったら？ダメだったらどうなるんだろう。クラスの中で、ただ勉強ができるということだけでしか認められていないあたしが、結局、有名高入試にも失敗ってことになったら...

ナレーション

その時、わたしの耳に、いつか、母が冗談めかしていった言葉がよみがえってきた。

母

(エコー) 親がこれだけできる限りのことをしてやってるんですから、ダメだった時には、それなりに責任をとる覚悟でいてもらわないとねえ...まあ、この子ったら、塾と心でもするような勢いなんですよ。(エコー多重に)

恭子モノローグ

やめて！あたしだって、一生懸命やってるのよ。でも、あたしは「勉強する機械」じゃない。そんなに西大付属がいいなら、お母さんが行けばいいじゃない。

ナレーション

そんな気持ちを引きずったまま受験した国立西大付属高校。そして2日後の合格発表の日、わたしは重い足取りで、発表の会場へ向かった。押しつぶされそうな緊張と不安を抱えながら、ほかの受験生たちに追い越され、ノロノロと足を運ぶ。向こう側からは、入学許可証の入った大きな茶封筒を抱えて、誇らしげに歩いてくる子。多分落ちたらしいのに、別段気にする風もなく友人とおしゃべりしながら来る子。そんなほかの受験生たちに目をやりながら、自分だけが、これから運命の決断の時を迎えるような、息の詰まる思いを味わっていることに、なぜかひどく腹が立った。

校門に入り、敷き詰められた砂利の上を、できる限りゆっくと踏み締めてゆけけれど、門からわずか数十メートルの発表掲示板までは、すぐに着いてしまった。握り締めた受験評の番号、382の数字が、頭の中でグルグル回っていた。

恭子モノローグ

241、249、268、...355、371、さんびゃくきゅうじゅう... ない！

(音楽)

(ショッキングな感じ)

ナレーション

それからどうやって駅まで歩いて電車に乗ったか、自分でもよく覚えていない。気がつくと、家に帰るのとは反対方向の、私鉄の下り電車のホームに立っていた。ただ「終わったんだ。終わったんだ」という思いだけが、空回りしていた。ホームに入ってきてはたくさんの人をのみ込んで発車していく何本もの電車を、ポン

ヤリと見送っているうちに、次々と、母の顔、クラスメートの顔が浮かんできた。

母 (エコー) 親がこれだけのことをしてやってるんだから、ダメだったら、責任とるぐらゐの覚悟はしといてもらわないとねえ。おほほ…。

クラスメート (エコー) 久保さんなら国立合格間違いなし。」高校へ行っても、勉強頑張って下さい。」目指せ西大ストレート!」(エコー多重に)

恭子モノローグ もうみんなのところへは帰れない。こんな惨めな姿を見せたくない! 今更、やっぱり落ちました」なんて言えない。これじゃ、今まであたしのやってきたこと、結局全部無駄だったってことになってしまう。そうよ、この3年間、必死になって勉強したのも、全部無駄。今更、西大付属がダメだったからって、ほかの高校へなんて行けやしない。本当にあたし、どうなってしまおうだろう。このまま帰りたい。帰れない!

ナレーション その時、数週間前の、高知でのおばあちゃんの告別式のことを、ふと思い出された。写真の中の、安らかな表情のおばあちゃんの顔。

恭子モノローグ おばあちゃん、あんなに長いこと病気で苦しんでいたのに、最期は、ほっとしたような顔つきだった。そうよ、どんなに頑張って勉強したって、いつかは大人になって、死んでしまおうだもの。それなら、いつ死んだって同じじゃない。つらい思いをして、結局こんなふう受験に失敗してしまうんなら、なおのこと。どうせ、受験もクリアできないあたしなんか、お母さんにとっても、クラスのみんなにとっても、要らない人間なんだ。だったら、だったらあたしも、早くおばあちゃんのところへ行っ、て、おばあちゃんみたいに楽になりたい。

ナレーション わたしはいつの間にか立ち上がり、何かに引きずられるように、ホームの端まで歩いていこうとしていた。

(効果音) (電車が入ってくる音)

佐々木友美 久保さん? 久保さんでしょ?

恭子 あ、佐々木さん。

友美 あービックリした。今電車に乗ろうとしたら、だれかがフラフラ歩いて、ホームに転げ落ちそうになるじゃない。びっくりして駆け寄ったら久保さんなんだもの。大丈夫? めまい?

恭子 ううん、何でもなし。佐々木さんこそ、どうしたの、こんな駅で?

友美 あのね、あたし、今日、合格発表だったの。あたし、埼玉の高校受けてたんだ。

恭子 そうだったの。で、どうだった?

友美 うん、受かった! もう最高にラッキーって感じ。

恭子 そう、よかったね。おめでと。

友美 うん、ありがと。あたし、単願だったから、何とか受かったようなもんだけどね。これで4月から埼玉中央女子高ってわけなんだ。もう、あんまりうれしくてね、発表の場所に手袋落っことしてきちゃったらしいんだけど、ちっとも気になんない。あ、

久保さんは？ 今日、試験？

恭子 ううん、発表。西大付属の。でもダメだったの。

友美 あ、ごめん。あたしったら、つい調子に乗って、自分のことばかりしゃべって。西大付属なんて、雲の上みたいな学校受ける人もいるんだあ。でも久保さんなら、どこでも入れるよ。大丈夫だって。元気出して頑張ってるの見て、“あ、自分も少しやんなきゃ”って、いつも励まされていたんだよ。

ナレーション 埼玉の中央女子高、あんなに偏差値低い高校にやっと単願で入れたとって、こんなに喜べる子もいるんだ。わたしにとっては、ちょっとした驚きだった。たった今の今まで、西大付属に入れないくらいなら、死んだほうがマシだと思っていた自分がバカらしくなるほど、彼女は明るかった。

友美 (クシャミ) あー寒い根、こんなところで立ち話してたら、風邪引いちゃうよ。とにかく電車に乗ろうよ。一度学校に戻るでしょ？

恭子 うん。

ナレーション すっかり佐々木さんのペースに乗せられて、電車で揺られながら、わたしは、もう一度おばあちゃんの告別式のことを思い出していた。あの不思議な明るさはなんだったんだろう。教会の人たちの賛美歌も、牧師さんのお話も、まるで生きているおばあちゃんに向けられているようだった。“また会う日まで”… “永遠の命”…。

恭子モノローグ そう言えば、牧師さんはこう言った。「おばあちゃんは、死んで、どこにもいなくなっちゃったわけではない」って。あたし、さっき、一瞬、死んじゃおうかな」って思った時、心が空っぽになったみたいだったけど。でも、おばあちゃんにとって、死ぬってことは、それで終わりじゃなくて、もっと先の希望があったのかもしれない。そう、生イエス・キリストにある希望」って言ってたっけ。「イエス・キリストを信じた人は、永遠にイエスと共に生き続ける」って…。何だか今のあたしには、想像もつかない別の世界。でも、でもそれは本当にあるのかもしれない。だとしたら、こんなことで死んじゃうなんて、ほんとにバカみたいだ…。

駅員のアナウンス 高野台、高野台一。

(効果音) (駅の雑踏)

友美 久保さん、ほら、ボンヤリしてると乗り越しちゃうわよ。

恭子 あ、もう着いたんだ。

ナレーション 駅の人込みにもまれながら、“そうだ、春休みに、もう一度高知の田舎を訪ねてみよう。そして、あの教会に行ってみよう”、そんな思いが心に広がっていった。

< 完 >